

都市計画道路 南海中央線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報

泉大津市教育委員会 生涯学習課 文化財係

2010.3.15

◆例言

1. 本書は、池上曾根遺跡内で計画された泉大津市森町1丁目、2丁目に所在する都市計画道路南海中央線森地区（以下、森地区）の発掘調査報告書である。都市計画道路南海中央線（以下、南海中央線）は、堺市、高石市、泉大津市、泉北郡忠岡町、岸和田市の5市町を結ぶ全長18kmのうち、泉大津市、高石市部分の名称である。

2. 発掘調査は、泉大津市都市整備部街路課が実施主体となり、平成20年度、21年度にわたり、埋蔵文化財発掘調査の経費を負担し、泉大津市教育委員会生涯学習課文化財係の指導のもと、下記の工程と体制で実施した。整理作業は発掘調査と並行して行い、平成22年3月15日、本書の刊行をもって完了した。本書の執筆、編集は虎間麻実、土江文子（泉大津市教育委員会生涯学習課文化財係）が行った。

3. 工程及び体制

平成20年度調査

- ・擁壁1～3 平成21年2月6日～3月12日

坂口昌男（泉大津市立織編館）、村田文幸（泉大津市教育委員会生涯学習課文化財係）、國分篤志、鈴木啓史（外業調査員）、桑宮慶一、丹生泰雪、野田由恵、山中麻衣子（外業調査補助員）

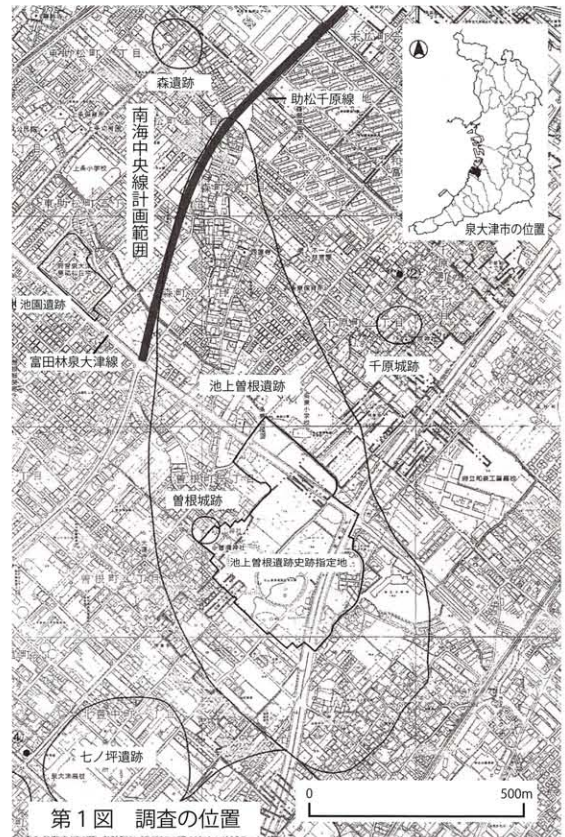
平成21年度調査

- ・道路1 平成21年5月27日

虎間麻実、土江文子

- ・道路2 平成21年7月27日～8月20日

虎間麻実、土江文子、田之上裕子（外業調査員）、野田由恵（内業調査補助員）



第1図 調査の位置

◆凡例

1. 本文及び図の基準高は、T.P.（東京湾平均海水位）を基準とし、プラス値を記している。使用単位はメートルとし、小数点第一位までを記している。
2. 位置図等に付す座標値は泉大津市都市整備部街路課提供の資料に基づく。単位はメートルである。また、これらに付す方位針は磁北である。
3. 断面の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（1987年度版）を使用した。
4. 遺構の使用単位は、メートル単位で少数点第二位まで、遺物はセンチメートル単位で小数点第一位までとし、遺物の縮尺は4分の1である。

◆調査に至る経緯

南海中央線は、主要地方道泉大津美原線（高石市綾園7丁目付近、以下、泉大津美原線）側道を起点とし、市域を南北に横切り泉北郡忠岡町北出3丁目に至る全長4,020mで、既に曽根地区（880m）、池浦地区（850m）が供用されている。このうち、主要地方道富田林泉大津線（森町2丁目付近、以下、富田林泉大津線）から泉大津美原線の間1,100mは森地区と称され、幅員25mの完成予定であるが、池上曽根遺跡の西端に位置するため着工に先立ち発掘調査を実施した。

森地区は、住宅と水田、畑などの耕作地が混在する地域である。発掘調査は、未買収地や隣接する耕作地への進入用通路などを除く道路用地買収箇所において、平成20年度に擁壁部分、平成21年度に道路部分について実施した。いずれも重機掘削の後、人力掘削とした。調査概要は以下のとおりである。

◆調査の概要

◇平成20年度調査（擁壁1～3）

富田林泉大津線を起点として市道助松森千原線（以下、助松森千原線）の間、約350mの東西擁壁部分を北から1～3とした。いずれも掘削は擁壁の基礎部分までとしたため、主に断面観察となった。工程順にその概要を述べる。

・擁壁1（調査期間 平成21年2月6日～10日）

調査範囲で最も北に位置し、北で助松森千原線と接する。西側擁壁部分にトレンチを設定した。トレンチの総延長は約56.4m、幅0.8～2.1m、深さは現況地表面から0.5～1mとし、断面観察を行った。現況地表面は耕作土でT.P.4.9～4.4m、北に向かい低くなる。包含層まで至らず、最下層で旧耕土や旧床土がみられ遺構、遺物は認められない。

・擁壁3（調査期間 平成21年2月6日～10日）

富田林泉大津線と南で接し、調査範囲で最も南に位置する。擁壁1と同時にいった。トレンチは1箇所とし、西側擁壁部分に長さ89m、幅と深さは擁壁1とほぼ同じとした。現況地表面はT.P.6.2～6.3mを測る。

トレンチ中央の北側と南側では、様相が大きく違う。北側の標準的な層序は、現地表土の耕土、床土、包含層である褐色微砂及び砂泥、黄褐色細砂である（第3図断面1）。T.P.5.9m付近の褐色系の砂層は包含層で、これらをベースとする遺構（同図断面1④、⑤）と、そこから約0.2～0.3m下層の黄褐色細砂をベースとする遺構（同図断面1⑦）がある。黄褐色細砂は、T.P.5.7～5.8m付近でトレンチ全体にわたり認められる。遺構は、平面で土坑9基、溝状遺構2基を確認した。北から南へ、土坑5基、約4.6m南に幅1.4mの溝状遺構、約6m南に幅0.3～0.4mの溝状遺構、約8.8m南に土坑4基がある。このうち幅1.4mの溝状遺構は、包含層をベースとするが、そのほかは黄褐色細砂をベースとする。

南側は、現地表土の耕土直下で褐色砂礫層が広範囲に堆積する。自然流路もしくは支流の一部の流入と思われ、湧水が非常に激しい。この砂礫層が無い部分は黄褐色細砂をベースとし、不定形な土坑数基が平面で見られる。

遺物（第4図1～13）

すべて破片で、総数260点。北側から220点、南側から40点余りで（1）の土師質土錘1点が唯一図示できる。北側の約8割は土師器、残りは須恵器である。（2）～（7）は北端の遺構付近から出土した。（2）～（5）は須恵器で、（2）は台付壺口縁部と思われ、溝状遺構周辺から出土。（6）は土師器小皿で復元口径15.0cm、器高2.3cm。（7）は土師質甕で内部にススが付着する。（8）～（13）は北端の黄褐色細砂をベースとする土坑から検出した。（13）は土師質甕で、体部外面にススが付着する。

・擁壁2（調査期間 平成21年2月23日～3月12日）

擁壁1と3の間、富田林泉大津線から北へ100～250mの間に位置する。東西両側にトレンチを設置した。規模は、東が、長さ146.4m、幅0.8～1.4m、西が、長さ54.4m、幅0.8m、深さは0.45～1.02mを

測る。東西両トレンチの遺構検出地点の層序は現耕作土、現床土、黄褐色を基調とする砂質シルトで共通している（第3図断面2）。この層を含む下層の2層は遺物包含層（同図断面2③、④）で、最下層の黄褐色シルトをベースとした遺構を検出した検出面は、概ねT.P.5.2～5.4mを測る。

東トレンチ中央から北側半分は、土坑数基と溝状遺構がみられる。溝状遺構からの遺物は認められない。溝状遺構の検出は、T.P. 5.2m付近である。

中央付近ではT.P.5.2m付近で、トレンチに直交する幅7.5mの河川状遺構がある。埋土は、黄灰色を基調とする粗砂で深さは0.33m以上。自然堆積で遺物は認められない。

東トレンチ南端から30mまでの範囲でトレンチに直交する溝状遺構が5条、西トレンチ南端から50mまででトレンチに直交する溝状遺構が14条と河川状遺構が、それぞれみられる。溝状遺構は耕作溝と思われ、東西とも、幅0.3～1.0m、深さは0.1m前後、埋土はオリーブ褐色、暗灰黄色系の砂質シルトである（同図断面2⑤～⑦）。

遺物（第4図14～18）

すべて破片で、総数181点。土師器と須恵器がほぼ同数を占め、磁器、陶器がそれぞれ数点ずつであった。（14）～（16）は、東トレンチの河川状遺構から検出した。（17）、（18）は白磁で現地表土の水田耕作土の排土からである。

◇平成21年度調査（道路1、道路2）

昨年度に行った擁壁部分の調査に続いて、道路建設部分における調査を行った。

まず、調査箇所を選定、遺構面の確認、掘削土量の把握などのため、坪掘りによって土層の堆積状況を確認した。この調査を道路1とした。

次に道路1の調査結果を受けて、調査可能範囲にトレンチを3箇所設定し調査を行った。この調査を道路2とした。以下それぞれの調査についての概要を記す。

・道路1（平成21年5月27日）

トレンチは4箇所、南から順に1-1、1-2、1-3、1-4である。いずれも幅約1.5m、長さ約2mの範囲を重機により掘削し、断面観察により土層の状況を確認した。

1-1 厚さ0.23mの現地表土の耕作土の下に包含層等は認められなかった。T.P.5.3mで地山と判断した。遺物の出土は見られなかったが、トレンチ南側の耕作地で7世紀末から8世紀頃の須恵器(19)、(20)（第4図）等が表面採集されたので図示しておく。

1-2 厚さ0.25mの現耕作土の下に層厚0.16mの中世包含層（灰黄褐色粘質土）を確認し、現地表下約0.4m（T.P.4.5m）で遺構検出面が認められた。これより下位は地山と考えられる。

1-3 厚さ0.55mの盛土の下に、中世以降の包含層（オリーブ黒色砂混粘質土）が厚さ0.4mで堆積する。現地表下0.95m（T.P.2.4m）で遺構検出面を確認した。

1-4 盛土、旧耕作土の下層に厚さ0.32mの中世包含層（灰オリーブ砂質土）を確認した。現地表下0.55m（T.P.1.9m）で遺構検出面が認められた。包含層には土師器、須恵器が少量と弥生土器甕(21)、瓦質羽釜(22)（第4図）等が含まれていた。

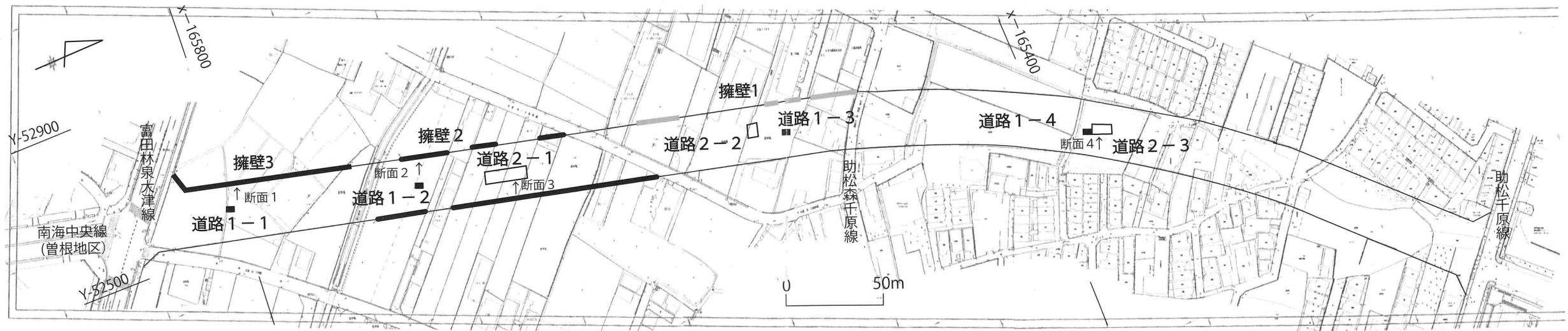
以上の結果、1-2より北側で調査が必要であると判断した。なお現地では、1-1地点から道路1-4地点を見通しても、目視では高低差がそれほどあるように思われませんが、実際には現況地表面及び遺構検出面ともに、北へ向かって3m近く徐々に下降していることが判明した。

・道路2（平成21年7月27日～8月20日）

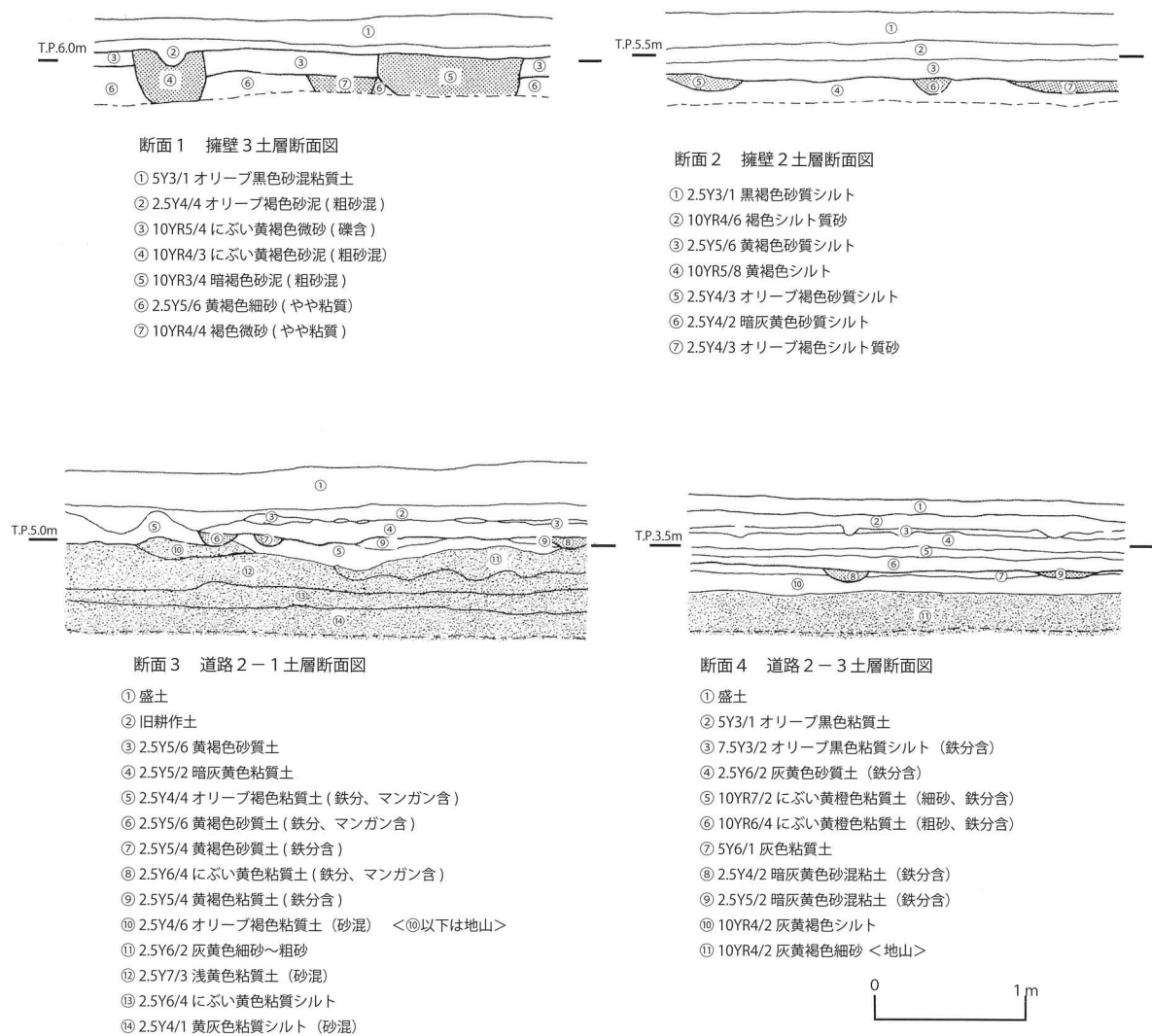
トレンチは3箇所、南から2-1、2-2、2-3である。

2-1 トレンチは幅5m、長さ20mで面積は100㎡である。基本層序は盛土、旧耕作土の下に中世包含層（第3図断面3④暗灰黄色粘質土）が堆積し、その直下、現地表下約0.5m（T.P.5.1m）で時期差のない整地土（同図断面3⑤オリーブ褐色粘質土）をベースとする中世期の遺構検出面を確認した。

トレンチの南側は近代以降の水田耕作に伴う攪乱をうけるが、北側では中世後半に属する耕作溝が検出された（同図断面3⑥～⑧）。耕作溝は畝と畝の間に掘られた鋤溝である。条里型地割に沿い、



第2図 調査区配置図



第3図 各調査区の土層断面図 (部分)

北から45度～55度西へ振る方向へ平行に掘られた鋤溝群が42条、密接した状態で検出された。鋤溝の規模は、幅約0.15～0.5m、深さ約0.1m～0.3mであり、幅0.25m、深さ0.2mが標準的である。鋤溝の埋土は黄褐色粘質土等で、土師器細片を含むものもあるが、遺物は僅かである。

遺物 (第4図23、24)

出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦器、弥生土器、石器等、130点余りである。(23)、(24)は中世包含層からの出土で、(23)は土師器皿、(24)は青磁皿である。ともに14世紀代に属する。

2-2 水路敷設のコンクリート基礎による攪乱及び湧水が著しく調査が困難であったため、トレンチを縮小しての調査とした。

2-3 トレンチは幅5m、長さ10mで面積は50㎡である。基本層序は、盛土、旧耕作土の下に近世以降の耕作土 (第3図断面4④、⑤)、中世の耕作土 (同図断面4⑥) が残る。現地表下0.5m (T.P.3.3m) で中世期の遺構検出面が認められ、ここでも鋤溝 (同図断面⑧、⑨) が検出された。その下位には風化した弥生土器細片を包含する灰黄褐色シルト層が約0.1m堆積することを確認したが、遺構は認められなかった。

検出された鋤溝は、2-1のそれとはやや様相を異にする。北から東へ27度振り、ほぼ南北方向に掘られた溝は、概ね3条と捉えることができ、調査区外へ延びている。床土が残るので水田に伴う溝かと考えられる。溝の幅は0.15～0.25m、深さ0.05～0.15m、埋土は暗灰黄色粘土で、遺物はほとんど含まれない。

遺物 (第4図25～31)

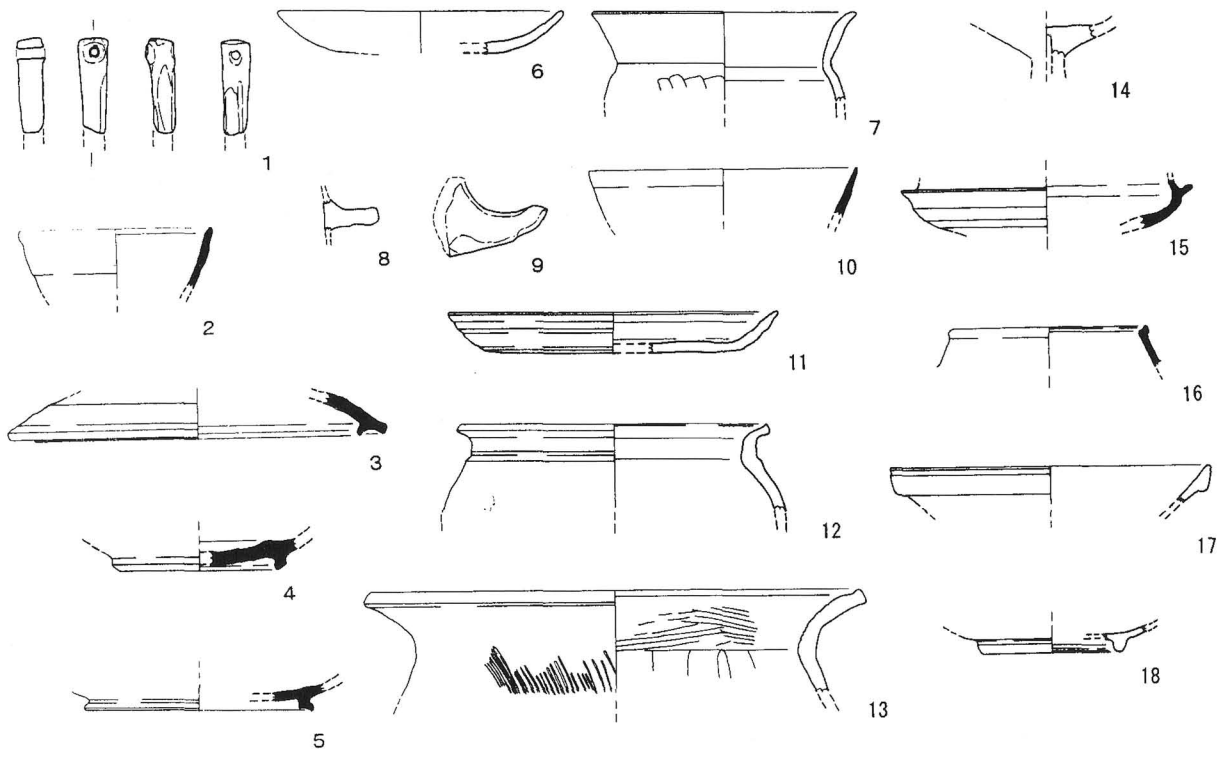
土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、陶磁器、瓦等が約180点出土した。(25)は白磁椀、(26)、(27)は土師器小皿、(28)は瓦器椀、(29)は唐津焼の皿、(30)は土師質甕、(31)は須恵質の土錘である。

◇まとめ (第6図)

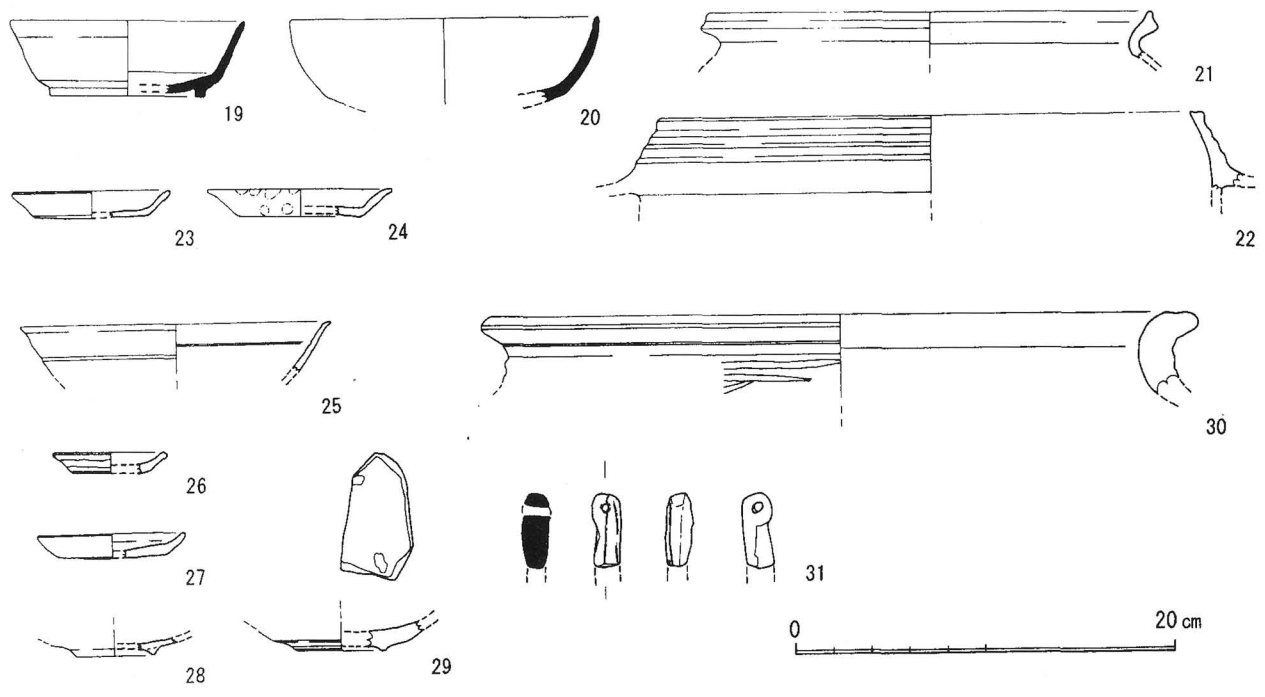
2ヶ年に分けて発掘調査を実施した。平成20年度調査は平面が狭小な上、出土遺物も小破片で、遺構の時期決定の決め手に欠ける。6～7世紀及び中世の遺物を包含する層が確認できる点でとどめたい。

2ヶ年の調査に共通し、また主な遺構である鋤溝は、いずれも検出地点 (擁壁2、道路2-1) が間近で、検出面の高さ (T.P.5.2m付近) がほぼ同じであることから一連のものである可能性が高く、14～15世紀の所産と推定される。この鋤溝検出状況から調査区での土地利用の一端を述べ、まとめとしたい。

森地区は近世初頭の史料が初出とされる森村に属し、付近の条里型地割水田は13世紀の形成と考えられている。鋤溝は、条里型地割水田により形成された水田の一部であることがほぼ断定できよう。



(1~18 擁壁 2・3出土)



(19~31 道路 1・2出土)

第4図 出土遺物

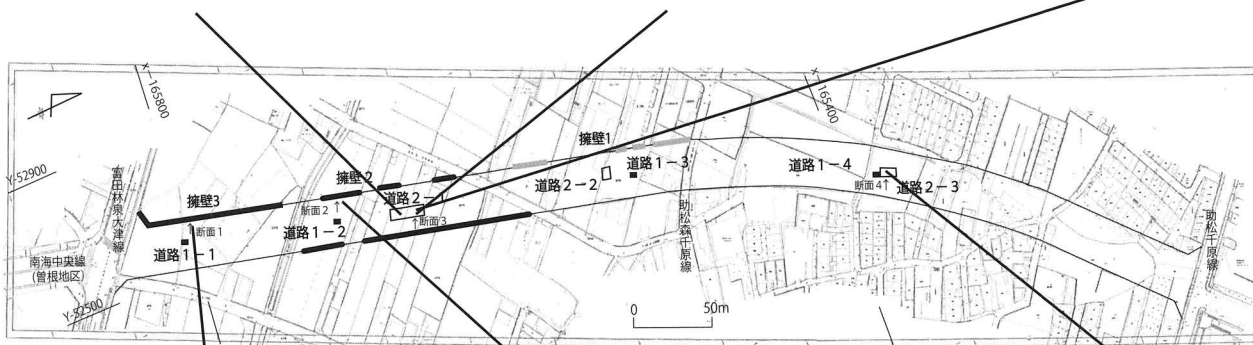
道路2-1中世鋤溝（北から）



道路2-1土層断面



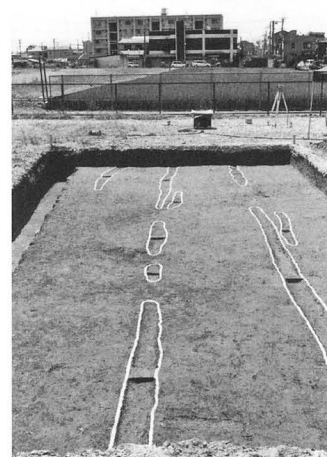
道路2-1鋤溝断面



擁壁3全景（北から）



擁壁2河道検出状況

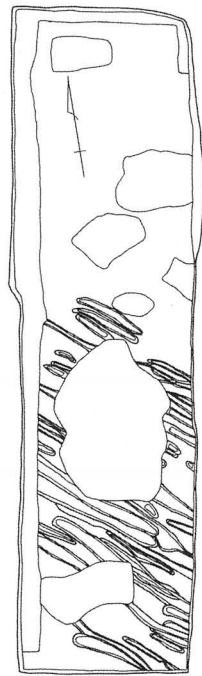


道路2-3中世鋤溝（北から）

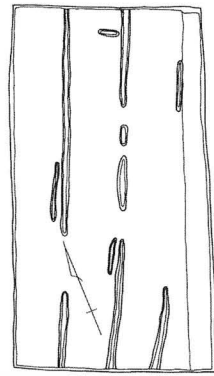
第5図 検出された遺構

調査区の東側は、南北方向に自然堤防状の微高地を伴う旧河道の存在が従来から指摘されている。この微高地は、現在も地形図上で曾根町～森町付近にかけての地割の乱れとして見る事ができる。その範囲は、南は池上曾根遺跡史跡指定地内の延喜式内社曾根神社の北50mから、北は2-3の北約90mに至る間、約870mと想定できる。同じく現在の地形図上からであるが、幅は東西30～150m、標高8.6～4.9mと、北に行くに従って徐々に低くなる(1/2500市域図平成16年一部修正による)。微高地の形成は、弥生時代後期～古墳時代初頭期までの榎尾川本流系の水流によるものと推定される。付近の小字名は、条里制の坪地名を表す名称(二ノ坪、三ノ坪)と、土地の盛り上がり、山林、山野の意味をもつ名称(山井、山ノ花)とがあり、後者は微高地の地形に由来すると思われる。

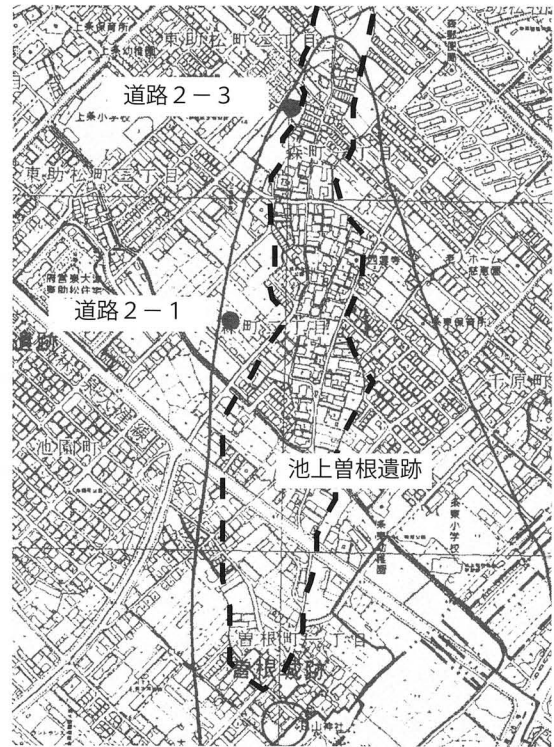
鋤溝の走行方向をみると、微高地から約150m西側に位置する調査区南側(擁壁2、2-1)は北西方向、微高地北西端の調査区北側(2-3)は南北方向の違いがみられるが、両者間には約250mの距離があり、走行方向の相違は、この微高地に制約を受けた結果であるとしたい。



道路2-1 遺構平面図



道路2-3 遺構平面図



中世鋤溝検出の位置と曽根町から森町付近の微高地（破線内）

第6図 中世鋤溝遺構図と検出位置

- 参考
- ・ 史跡池上曽根遺跡保存整備事業報告書『史跡池上曽根遺跡発掘調査報告書2001～2007—史跡整備に伴う第2期発掘調査—』和泉市教育委員会、財団法人大阪府文化財センター 2008
 - ・ 『泉大津市史 第1巻上』泉大津市 2004
 - ・ 泉大津市紀要第8号『泉大津市の地名』泉大津市教育委員会 1984

報告書抄録

書名	と し けい か く ど う ろ な ん か い ち ゅ う お う せ ん け ん せ つ と も な ま い ぞ う ぶ ん か ざ い ほ く つ ち ょ う さ が い ほう 都市計画道路南海中央線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報			
シリーズ名 番号	泉大津市文化財調査報告 45	編著者名	虎間麻実 土江文字	
編集機関	泉大津市教育委員会	所在地	〒595-8686 大阪府泉大津市東雲町9番12号	
所収遺跡	い け が み そ ね い せ き 池上曽根遺跡	所在地	お お さ か ふ い ず み お お つ し も り ち ょ う 大阪府泉大津市森町1丁目、2丁目	
コード	市町村	272060	遺跡番号	
経緯度 (世界測地系)	北緯	34度30分25秒～30分45秒		
	東経	135度25分26秒～25分37秒		
調査期間	2008年2月6日～2009年8月20日		面積	599.39 m ²
調査原因	池上曽根遺跡内における都市計画道路南海中央線（森地区）の建設			
主な時代	古墳、奈良、中世、近世	主な遺構	鋤溝、土坑、自然河川	
特記事項	古墳時代初頭期までに形成された微高地に規制を受けた14～15世紀の鋤溝			